資料２－４

達古武地域の森林再生の基本的考え方（要点）

１．森林再生の目的と目標設定

(1) 目　的

○生態系の質と多様な機能を総合的に回復

　達古武沼及び周辺河川の集水域を対象として、現状では裸地、ササ地、植林地が目立つ丘陵地に、ミズナラなど落葉広葉樹林を主体とした、この地域本来の豊かな森林を再生する。そのことによって、湖沼、湿原、湧水、河川などの水環境と周辺の森林が一体となった生態系の質を向上させ、生物の多様性と、保水力、土砂流出防止などの機能を総合的に高めていく。

○自然林再生のモデルを提示

　達古武地域には、湿原とその周辺の集水域・涵養域が一体となった釧路湿原を取り巻く生態系の縮図が成立しており、生態系全体を視野に入れて、自然林回復を主眼においた再生を進めていく上でのモデルを提示する。

(2) 目標の設定

○過去の生態系の変遷を踏まえた目標設定

　この地域では、明治以降、用材、パルプなどのために伐採が繰り返され、薪炭材の採取、山火事の影響などもあって、現在は比較的若い森林（林齢３０年前後）が多いと考えられる。また、戦後、カラマツ植林地が拡大したことなどに伴い、植林地が占める割合も大きく、伐採跡地や伐採後の更新困難地もみられる。

　こうした森林の変遷を把握した上で、この地域の生態系の質が大きく変容した時点を検討し、それ以前の状態に戻していくことを再生の目標として設定する。

２．再生の計画･手法

○計画策定にあたっては、関連する集水域全体を対象として、自然的・社会的な状況、過去からの変遷等を把握。そのデータに基づき、生態系保全・回復、土砂流出防止などの視点から、保全・再生の必要性、優先度の高い地区を抽出。抽出された地区ごとに、生育阻害要因などに応じた効果的な再生手法を検討する。

○自然性の高い落葉広葉樹林など、保全の必要性の高い森林については保全を充実させるための取組を進める。その上で、再生の優先度の高い場所から、自然林再生のための事業（荒廃地やササ地での自然林再生、人工林から自然林への樹種転換など）を実施する。

○自然林再生にあたり、初期段階では植栽、下刈りなどの人為的手段を加えていくが、最終的には自然が自らの力で自律的に再生していく状態を目指す。

○従来の林業や造園の技術的知見を活かすとともに、生態学的な配慮を重視

した手法を確立する。
○植栽する場合、ミズナラなど、本来の生態系で主要な役割を担っていた樹種を選定する。また、現状の土質や気象条件などを考慮して、立地条件に応じた樹種選定（適地適木）を行う。
○遺伝的攪乱を防ぐ観点から地元産の種苗を用いることを基本とし、そのための育苗システムを確立する。
○単に植栽を行うだけでなく、生育阻害要因を緩和したり、天然更新を促す条件を整えるなど、対象地の状況に合わせた複合的な手法を用いる。
○地域生態系に関する科学的データを共有し、地域の社会的な合意形成を図りつつ、取組を進める。

3．モニタリングと評価

○対象地域の生態系の現状を正確に把握し、再生の方向性と到達度が評価できるような「指標」を設定する。
○森林生態系回復の指標として、例えば、樹木サイズ、種組成、稚樹密度、森林性動物の種数・密度など、「再生過程」が客観的に評価できる項目を選定する。また、土砂流出防止などの機能がどの程度発揮されたかを把握していくための指標も併せて検討する。
○再生サイトと比較するためのリファレンスサイト（標準区）を設定して、再生サイトの状況が標準区の状況にどれだけ近づいたかを継続的にモニタリングする。
○モニタリング結果に基づき、「再生過程」を評価して、事業内容を見直していく。

4．市民参加･地域連携のあり方

○今回の調査・事業は、この地域で自然の保全・再生を目的としたナショナルトラスト活動を進めてきたＮＰＯ法人「トラストサルン釧路」と環境省の協働によって実施する。地域に根ざした活動を実践してきたＮＰＯ法人が関わることによって、幅広い市民参加と地域との連携のもとでの再生事業を展開する。
○現地の自然条件の中で、実際に採種、播種、植栽、調査などの作業を市民参加により試験的に実施することを通じて、市民参加の可能性や課題を整理する。幅広い参加を得るためには、市民レベルでも実施可能な安全で簡便な作業手法の確立や、再生事業を実体験する場、拠点の提供も必要である。ボランティアとしての市民レベルの協力には限界もあり、専門集団との連携・役割分担を図る。
○地元産種子の採種、苗の生産管理、植栽地の維持管理などには、地域の自然とともに暮らす住民の協力が欠かせない。こうした作業過程に集水域周辺の地域住民や生産活動を営む人々にも積極的に参加・関与してもらうことによって、地域との連携・協働関係を築き、再生事業が地域社会に貢献するものとなることを目指す。